

原著論文

県民運動「しまねのふるまい推進プロジェクト」における 「あいさつの教育」

島 田 博 司

Greeting Education in “Shimane-no-Furumai-Suishin Project” (Project for Promoting and Encouraging Good Manners and Behavior in Shimane Prefecture)
as Prefectural Citizen Action

SHIMADA Hiroshi

Abstract : It is said that many children in Shimane prefecture join in regional activities and greet each other. The purpose of this paper is to demonstrate the education regarding greeting, especially the greeting campaign, in Shimane prefecture.

The findings are as follows: 1) “Shimane-no-Furumai-Suishin Project” as prefectural citizen action contributed to the education regarding greeting. 2) There are many cases where personal greetings can be established in “Shimane-no-Furumai-Suishin Project”. 3) After the greeting campaign, some children tend to cease greetings if there are poor greetings among adults and others.

Future tasks are as follows: 1) It is to be hoped to make a database of the greeting campaign where homes, schools, and communities have cooperated. 2) We need to explore a new approach to the greeting campaign according to the circumstances, especially for high school students.

Key Words : greeting campaign, prefectural citizen action, “Shimane-no-Furumai-Suishin Project”, moral education, special activities, cooperation among homes, schools, and communities

要旨：本論の目的は、子どもの地域活動への参加率や地域でのあいさつ率が高いといわれる島根県における「あいさつの教育」の実態を明らかにすることにある。

その結果、1) 島根県では、あいさつ運動が県民運動である「しまねのふるまい推進プロジェクト」のなかで展開され、「あいさつの教育」が成果をあげていること、2) 「しまねのふるまい推進プロジェクト」におけるさまざまな活動を通して、あいさつを定着させていくことができていること、3) 「大人のあいさつ」ができていないと、あいさつ運動がおわったあと、子どもにあいさつがうまく定着しないこと、などがわかった。

今後の課題は、現場で実績をあげているあいさつ運動の事例をまとめたデータベースの構築や、時代にあったあいさつ運動の教育デザインの開発で、とりわけ高校生対象のものの工夫が求められている。

キーワード：あいさつ運動、県民運動、しまねのふるまい推進プロジェクト、道徳教育、特別活動、家庭・学校・地域の連携

I. はじめに

1. 「あいさつの教育」の位置づけ

「あいさつの教育」は、まずインフォーマルな教育として、家庭教育のなかのしつけにはじまる。続いて、フォーマルな教育として、保育所対象の『保育所保育指針』や幼稚園対象の『幼稚園教育要領』、認定こども園対象の『幼保連携型認定こども園教育・保育要領』では、言葉の獲得に関する領域である「言葉」でとりあげられている。また、小中高対象の『学習指導要領』や『学習指導要領解説』では、主として担う道徳や特別活動において基本的な生活習慣の形成や望ましい人間関係の育成(礼儀的教育)、さらにはよりよい学校生活づくりをするために位置づけられている。

とはいえ、現実には大学で改めて「マナーの教育」として「あいさつの教育」が必要とされるほど、あいさつは十分に習慣化されていない。社会人になっても、「ビジネスマナーの教育」として、「あいさつの教育」は欠かせなくなっている。

2. あいさつ運動の推奨

こうした状況のなか、家庭・学校・地域のなかで、「あいさつの教育」をどうしていったらいいかが現代的課題となっており、そのなかで「あいさつ運動」が推奨されてきた経緯がある。

あいさつ運動は、平成8(1996)年の中央教育審議会答申「21世紀を展望した我が国の教育の在り方について(第一次答申)」の「これからの地域社会における教育の在り方」のなかで、「地域社会の教育力の低下が指摘される中で、今日、地域社会の教育力の再生を促すことが極めて重要なことになっている。このため、地域の大人たちが率先してあいさつ運動、環境浄化活動、交通安全活動、防災活動などの地域ぐるみの啓発活動に取り組むことを大いに推奨したい」と述べられ、「行政も、こうした活動への支援を積極的に行ってほしい。地域を挙げてのこうした取組は、今日深刻化しているいじめの問題の解決にも資するものと考えられる」とされている。

その後、この方向性は学習指導要領にも反映され、平成20(2008)年度改定分の『小学校学習指導要領解説 道徳編』では、「家庭や地域社会との連携による道徳教育」の「多様な連携の創意工夫」において「家庭や地域と一体となって道徳性を高める実践活動を推進する」があがっており、そこでは「地域全体で、生活習慣や礼儀、社会生活上のモラルを身に付けるなど、道徳性を高める実践活動を推進することが考えられる。方法としては、早寝早起きや食事に関する生活習慣等を身に付ける活動、あいさつを促す運動、リサイクルや地域清掃等の環境美化にかかわる活動などがあり、地域の実態に応じて取り組まれる。また、地域が全体としていくつかの約束事や標語を決めて掲示するなど、心を育てる環境づくりをすることも考えられる。特に、情報メディアの急速な普及に伴う問題が子どもの心の成長に負の要因になっているといわれる現在、子どもの心の健全育成に大人の責任として対応していくためにも、地域の人々全体の意識の向上にもつながる活動や運動に協力していくことが求められている」と記され、あいさつを促す運動が例示されている。

また、『中学校学習指導要領解説 特別活動編』と『高等学校学習指導要領解説 特別活動編』の「各活動・学校行事の目標と内容」の「生徒会活動の内容の取扱い」の「よりよい生活を築くための諸活動の充実」において、「生徒会活動においては、学校生活における課題を解決したり、学校生活をよりよくしたりするための、生徒の自発的、自治的な諸活動を充実させる必要がある。そのためには、生徒会を構成する各組織が、校内の生活規律の充実や美化活動、あいさつ運動や遅刻防止運動など、具体的な目標を立て、よりよい学校生活づくりに参画するような取組を推進することが必要である」と記載され、あいさつ運動がとりあげられている。

なお、あいさつ運動は家庭・学校・地域の連携が比較的しやすい活動のひとつであるといわれているが、今回の学習指導要領の改訂ではあいさつ運動に関連する記述は消えている。

3. 「あいさつの教育」の実際

ところで、「あいさつの教育」は、実際にはどのように行われてきただろうか。

そこでまず、大学生を対象にこれまでの生育過程における家庭・学校・社会での「あいさつの教育」についてのレポートを求め、それをもとに実態を検討してみた¹⁾。その結果、「あいさつの教育」は家庭教育の果たす割合

が大きく、続いて学校教育がきていたが、社会教育ではほとんど事例がなかった。また、「あいさつの教育」が家庭・学校・地域の連携や協働のなかでどのようになされているのかについては、学生にそうした方面からレポートをまとめるような意識づけをしていなかったこともあり、ほとんど記載されていなかった。

続いて、同じレポートをもとに、「小中高におけるクラブ活動・部活動」と「あいさつ運動」の2つの活動があいさつに及ぼす影響について検討した²⁾。その結果、さまざまな活動場面で、自分があいさつをする側にまわることであいさつが定着するケースが多いことがわかった。そして、そのとき試されるのは、小さいころのように人にいわれてするものではなく自分からやるものに変えていくことであり、とくに青少年の育成課題として「あいさつの再社会化問題」があることが明らかになった。

4. 本論の目的

そこで本論では、あいさつ活動が盛んであるといわれている島根県をとりあげ、「あいさつの教育」、とりわけあいさつ運動が家庭・学校・地域の連携のなかでどのようになされているのか、その実態を明らかにしようとしている。その際、あいさつの定着に向けて、とりわけ青少年の「あいさつの再社会化」を促すにはどうしたらいいかについて、ヒントを得たいと考えている。

観点は2つある。ひとつ目は、小学校低学年までは、大人にいわれるがまま自分から大きな声であいさつをしても、思春期以降はそうはいかなくなる点である。そこで、学校教育のなかでは自分からあいさつをせざるを得ない状況をいかに設定するか、なんらかの仕掛けが必要だろう。2つ目は、これからの社会教育においては、「楽しさなくして参加なし」の観点³⁾が必要であることから、「あいさつの教育」において「楽しさ」をどうデザインしていったらいいかという点である。

Ⅱ. 島根県における「あいさつの教育」

全国的に家庭の教育力は核家族化や少子化などで低下し、また地域社会の教育力も都市化・過疎化の進行や地域社会の連帯の希薄化から失われつつあるといわれるようになって久しい。それは、規範意識やマナーの低下や、人と上手にコミュニケーションをとることができないといった子どもが増えているといったところに現れている。

「あいさつ」も例外ではなく、あいさつをしない子どもやできない子どもの問題が話題になることは少なくない。そんななか、島根県はあるプロジェクトを立ちあげた。

一般に子どもたちの地域活動への参加率や地域でのあいさつの実施率は、島根県は全国的にみて高い状況にあるといわれている⁴⁾。島根県は、こうした島根のよさを後世に伝えたいということで、今できること、大切にしていかなければいけないこととして「ふるまい」に着目し、地域社会全体、県民全体をあげての県民運動として、島根県の教育委員会、総務部、環境生活部、健康福祉部、警察本部などが連携して地道な取り組みをはじめた。それは、平成22(2010)年度にはじまった「ふるまい向上プロジェクト」(第1期)で、3年後の平成25(2013)年度からは「しまねのふるまい推進プロジェクト」(第2期)として展開されていく⁴⁾⁵⁾。

ところで、ここでいう「ふるまい」とは、「礼儀、作法、挨拶、しぐさ、モラル、ルール、しつけ、道徳、倫理観、生活行動、生活動作、思いやり」などを総称している。プロジェクトでは、「ふるまいはしまねの宝!」をスローガンに、乳幼児から大人まで「ふるまい」を定着させていこうとしている。その際、「三つ子の魂百まで」という諺があるように乳幼児期をとくに大切な時期と考え、乳幼児期からの養育や子育て支援、さらに小学校・中学校へとつなぐ一貫した教育などを充実させる取り組みが意識されている。

以下では、それぞれのプロジェクトにおいて、「あいさつの教育」がどのように展開されたかをみていこう。

Ⅲ. 第1期「ふるまい向上プロジェクト」〔平成22(2010)年度～平成24(2012)年度〕

1. 概要

島根県は、平成22(2010)年度に県民目標として「ふるまい向上」を掲げた。これを受け、「ふるまい向上プロジェクト」が「県民全体への「ふるまい」の周知」を目標にして立ちあげられ、平成24(2012)年度まで実施された。

家庭では、「親学ファシリテーター」を育成しながら「親学プログラム」を提供するなどして、生活習慣の改善が目指された。学校では、「ふるまい向上」の視点をいれたとりくみの充実が図られた。地域では、「公民館ふるまい向上事業」などが実施され、公民館などの社会教育施設が核となり、地域と一体となったあいさつ運動などが展開された。

その際、保育所や幼稚園、小学校、中学校、県立学校（高等学校・特別支援学校）、公民館等が「ふるまい向上プロジェクト」開始以前からやっていた活動を踏襲するだけでなく、独自の取り組みをすることが促された。

なお、「ふるまい向上プロジェクト」は、通称として「島根県ふるまい向上推進県民運動」が使われているが、各所で「ふるまい向上県民運動」という略称が用いられている。

2. 広報・啓発活動

プロジェクトでは、活動を周知するためにホームページを立ちあげるとともに、①標語とロゴマークの募集、②リーフレットの作成、③ふるまい推進指導資料の作成、④ポスターの作成、などが行われた。

1) 標語とロゴマークの募集

プロジェクトの活動の周知を図るために、プロジェクトの広報・啓発活動の第1弾として、ふるまい向上県民運動を進めていくための機運を高めるために、「合言葉」（標語）と「ロゴマーク」（絵柄。文字でもよい）が募集された。

募集ポスターは、島根県ふるまい向上推進県民運動協議会・島根県道徳教育推進協議会・島根県教育委員会・島根県県警本部によって作成された⁶⁾。募集期間は、平成22（2010）年8月20日から10月15日までで、結果は11月1日に発表された。

標語は、応募総数563点のなかから、最優秀賞の「見てまねて 感じて育つ 島根のふるまい」（飯南町・飯島良子さん）のほか、優秀賞として「ちょっとした気くばり・気づかい・心づかい心豊かに「ふるまい島根」」（大田市・秋風光規さん）、「さわやかに あいさつする人 かえす人」（出雲市・北村和子さん）、「ふるまいがよいと言われてちょいてれる」（松江市・菅沼匠人さん）、「おかえりと その一言でほっとする」（出雲市・田中さやさん）、「「ふるまい」は我が家の自慢 地域の誇り」（出雲市・橋本幸雄さん）、の5点が選ばれた。

また、ロゴマークは、応募総数230点のなかから、最優秀賞（松江市・嘉藤裕美さん）が1点選ばれた。

2) リーフレットの作成

続いて、プロジェクトの広報・啓発活動の第2弾として、「広がっています 島根のふるまい」というリーフレットのシリーズが、島根県ふるまい向上推進県民運動協議会・島根県道徳教育推進協議会・島根県教育委員会・島根県県警本部によって作成された。

①『広がっています 島根のふるまい』の作成

まず、平成23（2011）年3月、リーフレット『広がっています 島根のふるまいー平成22年度 島根県ふるまい向上県民運動取り組み事例』が作成された⁷⁾。

表紙では、さまざまな取り組み事例を紹介することが記されている。

1頁目には、「理念」と「島根県ふるまい向上Q & A」のコーナーがある。理念では、乳児から幼児へ、さらに小学生、中学生、高校生、（学生）、社会人までのすべての年代で、そして親や地域など社会ぐるみでふるまい向上に取り組むことがイメージ図で描かれている。「Q & A」のコーナーでは、新たに立ちあげたプロジェクトでの活動と既存のものとの関係について説明されている。「Q」での「ふるまい向上に関係する活動にすでに取り組んでいます、何をすればよいですか？」の問いかけに対して、「A」では「これまでのあいさつ運動、親切運動などの取り組みを、次の視点でもう一度見直すことが大切です」とあり、具体例として「どんな子どもになってほしいのか。なぜその取り組みが必要なのか」「これまでの取り組みに課題はないか、取り組み方法や指導の仕方、組織体制は有効なものか。見直した結果をもとに、みんなで共通理解をもち取り組みましょう」と書かれている。ここで、取り組みのひとつとして、あいさつ運動が例示されている。そこには、「相手からどんなあいさつをされるとうれしいのか、子どもと一緒に考える」「児童会、生徒会などを活用して、子どもたちの自主的な活動を促す」

「地区内の保、幼、小、中、高や保護者、地域の団体と連携して取り組む」の3つが記載されている。

2 頁から7 頁までは、ふるまい向上活動の事例集となっており、①様々な連携（5 事例）、②社会全体での取り組み（4 事例）、③保護者への働きかけ（7 事例）、④活動の工夫（7 事例）、の4 つの観点から紹介されている。

②『広がっています 島根のふるまいⅡ』の作成

続いて、平成 24（2012）年 3 月に、リーフレット『広がっています 島根のふるまいⅡ－平成 23 年度 島根県ふるまい向上県民運動取組事例』が作成された⁸⁾。

表紙には、取り組みの成果がでていることが、①ふるまい向上に関することへの教職員の意識が高まったか、②児童生徒の「あいさつ」がよかったか、③児童生徒の「人を思いやる言動」がよかったか、の3 つの観点から報告されている。

1 頁目と2 頁目はふるまい向上活動の事例集となっていて、①ふるまい向上の視点で取り組む（3 事例）、②広範囲での取組（2 事例）、③指導する側の考え方の見直し・共通理解（4 事例）、④保護者への支援（3 事例）、の4 つの観点からまとめられている。

3 頁目は、「親学プログラム」の広がりと「ふるまい向上コーディネーター」⁹⁾の活躍の様子が伝えられている。「広がっています 親学プログラム」のコーナーでは、親学プログラムは保護者が親としての役割や子どもとの関わり方について自ら気づき考えることを促すものであることや、島根県立東部・西部社会教育研修センターで親学ファシリテーターの養成を行い、親学ファシリテーターの活躍によって子育ての不安解消につながる仲間づくりに役立っていることなどが報告されている。

また、乳児やその保護者への支援をしていくために、県教委がコーディネーターを県の東部と西部に1 名ずつ配置し、幼稚園・保育所に訪問してプロジェクトの趣旨を説明したり、現状を聞いたりしながら保護者向けの研修や講演、職員向けの研修などを行っていることが紹介されている。

そして、こうした活動へのニーズは高いことから、平成 24（2012）年度からは「ふるまい向上指導員派遣事業」として、県内各地に「ふるまい向上指導員」を派遣する方針が伝えられている。

③『広がっています 島根のふるまいⅢ』の作成

最後に、平成 24（2012）年 12 月に、リーフレット『広がっています 島根のふるまいⅢ』が作成された¹⁰⁾。これは、ふるまい向上の取り組みの「成果」がまとめられている。

表紙では、同年 9 月に実施されたアンケート調査の結果より、プロジェクトに参加した各学校等からの報告や活動へのコメントが7 領域にわけられて紹介されている。

1 頁以降では、各学校等の取り組みの成果が、①保育所幼稚園（2 頁分）、②小学校（2 頁分）、③中学校（2 頁分）、④県立高等学校（約 1 頁半分）、⑤県立特別支援学校（約半頁分）、⑥公民館等（約 2 頁半分）、⑦教職員保育士（1 頁分）、の6 領域にわけて報告されている。

「保育所幼稚園」と「小学校」と「中学校」の各欄は、ほぼ同じスタイルでまとめられている。まず、各学校等からの声が、①あいさつ（・マナー）〔「保育所幼稚園」欄では、「小学校からの声」を含む〕、②生活習慣など、③豊かな心、④保護者や地域、の4 つの観点からまとめられ、最後に総括として⑤活動へのコメントが入れられている。

「県立高等学校」の欄は、県立高等学校からの声が、①生徒、②保護者や地域、の2 つの観点からまとめられ、最後に総括として③活動へのコメントがされている。

「県立特別支援学校」の欄は、県立特別支援学校からの声がとくに観点を設けずにまとめられ、最後に総括として活動へのコメントがなされている。

「公民館等」の欄は、公民館等からの声が、①各種事業（子ども中心）、②各種事業（通学合宿）〔＜通学合宿後の保護者アンケート＞の結果を含む〕、③保護者、④地域、の4 つの観点からまとめられ、最後に総括として⑤活動へのコメントが入れられている。

「教職員保育士」の欄は、公民館等を除いた各学校等の教職員・保育士からの声がとくに観点を設けずにまとめられ、最後に総括として活動へのコメントがなされている。

3) 指導資料の作成

それから、プロジェクトの広報・啓発活動の第3弾として、鳥根県・鳥根県教育委員会・鳥根県県警本部・鳥根県道徳教育推進協議会は、ふるまい向上の取り組みを保育所や幼稚園、小学校で促すために、ふるまい向上用の指導資料の作成を進めた。

① 5歳児用と小1用の指導資料の作成

その結果、平成23（2011）年3月に、「きらきらふるまい みんなにこにこ」「みんなきらきら ふるまいめいじん」作成委員会によって、指導資料として、5歳児用の『きらきらふるまい みんなにこにこ』¹¹⁾と、小1用の『みんなきらきら ふるまいめいじん』¹²⁾が作成された。

『きらきらふるまい みんなにこにこ』の1、2頁目の見開き頁では、「ひとりでやってみよう！」と元気なあいさつをすることが呼びかけられている。3、4頁目の見開き頁では、「どんなあいさつやおはなしをしているかな？」と問いかけ、「おうちの方へ」ということで話しあいが促されている。5、6頁目の見開き頁では、「こんなときどうする？」と問いかけ、再び「おうちの方へ」ということで話しあいが促す仕掛けとなっている。それから、添付資料として、「にこにこシール」（9個）、「もうちょっとシール」（6個）、「ざんねんシール」（4個）、「吹き出しシール（自由書きこみ用）」（6個）、「吹き出しシール（こんにちは）」（1個）が用意され、いろんな頁で工夫をして使うことが促されている。また、やや大きめの1点モノのシールとして「歯磨きシール」「手洗いシール」「絵本コーナーシール」「おはようシール」の4点が1個ずつ用意され、目立つところや気づきやすいところに貼るなどしての利用が促されている。裏表紙では、「おうちの方へ」ということで、「ふるまい向上県民運動」の意味や各頁の主旨が説明されている。

『みんなきらきら ふるまいめいじん』の1頁目では、「さあ1ねんせいの はじまりだよ」「ふるまいめいじんになろう！」と呼びかけられ、7つの名人例のひとつとして「あいさつめいじんになろう！」がとりあげられている。続く2頁目では、「ふるまいめいじん」とはなにかが説明されている。5、6頁目の見開きでは、「あいさつめいじんになろう！」ということで、鳥根の方言を交えたものも含めてさまざまなあいさつがあることや、その受け答えの仕方、きもちのよいあいさつのこつなどが紹介されている。また、「おうちの方へ」ということで身近な大人がまずお手本を示すことが大切であることが書かれている。そして、各名人のあり方の紹介がすべて終わった次の頁である17頁目は、添付資料として「ロゴマークシール」（22個）が用意されている。それとともに、「あいさつめいじんシール」をはじめとする7つの名人シールもあり、めいじんになれた箇所貼ることで、充実感が味わえるような工夫がしてある。さらに、一点モノのひとつきわ大きなシールで王冠が描かれた「ふるまいめいじんシール」が用意されている。これは最終頁となる18頁の中央に貼れるようになっており、その欄の下には「これできみはふるまいめいじん！」と書かれている。

② 指導資料の活用例をまとめたリーフレットの作成

その後、平成24（2012）年3月には、指導資料の活用例をまとめたリーフレット『「きらきらふるまい みんなにこにこ」（幼児版）「みんなきらきら ふるまいめいじん」（小学校版）活用例』¹³⁾が鳥根県教育委員会によって作成された。

1、2頁目の見開き頁で収録された「小学校版」コーナーでは、①学級会活動・朝礼・終礼等での活用、②道徳の時間での活用、③生活科での活用、④全校での活用、⑤家庭・保護者との連携での活用、の5場面が示されている。その際、あいさつは、道徳の時間、生活科、全校の3場面での利用が紹介されている。単元例などとともに、くり返し指導の必要性や、話し合い活動を通して意識向上を図ることがすすめられている。とくに幼保小の円滑な接続のためのスタートプログラムに位置づけて全校で活用した例では、道徳の時間と生活科以外に、学活や国語の時間を含めた指導がなされた安来市立みなみ小学校のケースが紹介されている。

3頁目の「幼児版」コーナーでは、幼稚園・保育所の保育で活用と、家庭・保護者との連携での活用、の2場面がとりあげられている。その際、あいさつは、家庭・保護者との連携での活用例を念頭に、降園前に一日の生活を振り返るシーンで、「どんなあいさつをしてるかな」「こんなときどうするかな」と問いかけることで、話しあいを促す事例が紹介されている。

4) ポスターの作成

さらに、プロジェクトの広報・啓発活動の第4弾として、「わが校ふるまい自慢ポスター」が作成された。このポスターは、平成24（2012）年の7月21日から11月11日にかけて、出雲市にある出雲大社周辺で開催された「神話博しまね」にあわせ、県内の小中学生がふるまい向上に取り組む様子を紹介するもので、同年4月に製作依頼がなされ、6月に19市町村別に合計26種類が作成された。ポスターは、県内を走るJR・一畑電鉄内、隠岐汽船フェリー内、その他県内の主な公共施設等で掲示された。

ポスターのフォーマットとしては、フレーム上部におかれた表題には「わが校ふるまい自慢ポスター 島根県（＋〇〇市町村名）ふるまい向上県民運動」と記載され、フレーム下部には標語とロゴマークと「島根県は、ふるまい向上県民運動に取り組んでいます」のフレーズが配置されている。フレーム内は、活動の様子を知らせる写真に吹き出しがつけられており、さらに各市町村の教育委員会の管内で各校がどのように県民運動に取り組んでいるかを紹介する欄が設けられている。

小中学校でのあいさつ運動などのあいさつ活動は、ポスターのフレーム内にある写真の吹き出しにて紹介されており、16ポスターでとりあげられている（表1）。また、地域でのあいさつ活動は、各市町村がどのように県民運動に取り組んでいるかを紹介する欄にて、4ポスターでとりあげられている（表2）。

表1 小中学校でのあいさつ活動

市町村名	学校名	活動の内容
松江市	井東小学校	学校、家庭、地域が一体となってあいさつ運動をする
	島根中学校	職場体験事前学習であいさつなどの仕方の演習をする
安来市	荒島小学校	通学路で保護者が小学生とあいさつを交わす
	伯太中学校	校門前で生徒があいさつ運動をする
出雲市	塩冶小学校	児童と保護者が協力してあいさつ運動を行う
	西野小学校	人権集会で、お互いがあいさつをしていこうと呼びかけている
	今市小学校	あいさつ運動を実施している
雲南市	佐世小学校	朝のあいさつ運動に取り組む
奥出雲町	小学校	児童・幼児・地域の方がいっしょになって登校時に校門であいさつ運動をする
	小学校	小学校6年生の案で、「元気なあいさつのできる小学校」を目指し「あいさつロード」をつくって取り組んでいる
	小学校	学校の合い言葉は「あいさつ けじめ 思いやり」。「ふるまい委員会」の人と先生に元気よくあいさつをし、その後おみくじを引いて占う「今日の運勢」もお楽しみとなっている
飯南町	頼原中学校	道端ですれ違う自動車や人に立ち止まってあいさつをする活動が地域から称賛されている
浜田市	三隅小学校	児童が昇降口であいさつの呼びかける
大田市	大田市立第一中学校	校長室、職員室前を「ふるまい通り」と命名、生徒、教員、外からこられた方との間で、元気なあいさつが飛び交っている
江津市	青陵中学校	職員と生徒会が一体となって、月2回の街頭あいさつのほか、週3日あいさつ運動をしている
川本町	川本中学校	学校前で登校してくる生徒たちにあいさつをする
美郷町	大和小学校	児童たちが職員室の入口で自主的に朝夕にあいさつをする
益田市	美濃小学校	登校前に地域の人といっしょに子どもたちがあいさつ運動をする
津和野町	日原小学校	児童会活動として、朝のあいさつ運動に取り組む
吉賀町	柿木小学校	昇降口でふるまいタスキをかけてあいさつ運動をする
	蔵木小学校	児童総会で「みんなのふるまい」について話し合う（写真中に、「あいさつを大きな声でする」のポスターあり）
海士町	福井小学校	運営委員会の子どもが幟をもって昇降口付近に立ち、登校してくる子どもたちに元気よくあいさつをする。迎えられた子どもたちは後者に入ると、今度は職員室と校長室へやってきて、教職員へ丁寧な朝のあいさつをする
知夫村	知夫小学校	民生委員さんが朝のあいさつ運動をする

表2 各市町村でのあいさつ活動の取り組み

出雲市	大社地域の学校では、「子ども・公民館活動」を展開し、地域でのあいさつ運動などの地域貢献活動に取り組んでいる
出雲市	15ある中学校区を単位として、地域・学校・家庭が協働して取り組むことを基本理念に、「地域学校運営理事会制度」と「一貫教育」の2本を軸にして、地域でのあいさつ運動に取り組んでいる
川本町	学校、家庭、地域が一体となってあいさつ運動に力を入れて取り組んでいる
吉賀町	「ふるまい標語コンクール」を実施するなど、町全体でふるまい向上に向けた取り組みを推進している。標語「さわやかに 明るいあいさつ 吉賀町」は、コンクールで青少協会長賞に選ばれた3つのうちのひとつ

3. 「あいさつの教育」の取り組み事例

続いて、リーフレット『広がっています 島根のふるまい』シリーズに掲載されたふるまいの取り組み事例のなかから、「あいさつの教育」をとりあつかったものをピックアップして、あいさつ運動をとりいれたものと、あいさつ運動以外の関連活動（あいさつ関連の活動で、あいさつ運動とは明示されていない活動）にわけて紹介しよう。なお、紹介された事例は、必ずしもふるまい向上のための取り組みとして行われているものばかりではなく、日ごろから行われているものもとりあげられている。

1) 『広がっています 島根のふるまい』より

まずは、平成22(2010)年度に作成されたリーフレット『広がっています 島根のふるまい』である。そこでは、①様々な連携、②社会全体での取り組み、③保護者への働きかけ、④活動の工夫、の4つの観点から、活動に「取り組んだ団体名」と活動の「概要」の一覧に続き、「表題」をつけて「具体的な取り組みの内容」が紹介されている。

①あいさつ運動をとりいれたもの

あいさつ運動に焦点をあてた具体的な取り組みには、5つの事例があがっている。

「様々な連携」の観点からは、益田市の高津小学校区の「PTAが子どもたちのあいさつの現状に問題意識をもち、地域とつながって、活動を展開する」がとりあげられている。表題は「PTAが動き出し、地域と連携を深めるキーマンに！－PTA発信のあいさつ運動「スマイルひとマルハートフル！」」で、まずPTAがあいさつに関するアンケートを実施し、地区懇談会にて地域で呼びかけたことがきっかけで地域全体として取り組んだことや、学校評議員が地域にたすきの作成を依頼し、その図案とあいさつ運動の名称を募集し、さらにはあいさつの歌もでき、連携が広がり、あいさつに対する機運が高まったことが報告されている。

「地域全体での取り組み」の観点からは、2校区の試みが紹介されている。ひとつ目は、出雲市の多伎中学校区の「子育てを地域全体で考える総合的な取り組みで、地域一斉あいさつ運動には、地元企業も参加する」である。表題は「子どもたちが明日の地域をつくる！みんな連携、地域で子育て！－地域・保幼小中・家庭が一体となった取り組み」で、地域学校運営ブロック協議会が中心となって、地域・学校（保幼小中）・家庭の三者協働で一体となった活動として「地域一斉あいさつ運動」が行われている。

2つ目は、出雲町の意東小学校区の「地域の大人が、子どもたちへの日常の声掛けなど大切にしたいことを明確にし、地域全体であいさつ運動に取り組む」である。表題は「地域みんなまると「ひろげよう明るいあいさつの輪」－地域が盛り上げる小学校全体で取り組むあいさつ運動」で、学校、幼稚園・公民館・地域・家庭が連携したあいさつ運動として、学校関係だけでなく、公民館の働きかけで地区全戸へ標語とシンボルマークを募集し、のぼり旗を作成し、毎月一定期間の一斉行動日を設けるなど、小学校区全域での運動となっている。あいさつ運動というと、とかく「おはよう」だけになりがちだが、ここでは家庭・地域それぞれで大切にしたいあいさつを決め、日常的な声かけも心がけられている。

「保護者への働きかけ」の観点からとりあげられているのは、浜田市立松原小学校の「親学プログラムをPTA研修に取り入れ、保護者同士のつながりを深める」である。表題は、「PTA研修会は、子育てをいっしょに考える会！」で、あいさつ運動を児童と教職員がいっしょに企画する試みがとりあげられている。

「活動の工夫」の観点からは、2つの試みが紹介されている。ひとつ目は、松江市にある県立宍道高等学校の「あいさつ運動を通して、地域と共に高校生を育てる」である。表題は「高校生にもあいさつを！地域へも協力を求めて－小中学生だけでなく、高校生も地域の一員として」で、多くの生徒が利用する宍道駅ではほぼ毎日教員が駅にたって生徒を迎え、あいさつをする試みである。高校のあいさつ運動は、地域連絡協議会の場で力をいれられていることが伝えられ、地域にも理解や協力を求めた活動となっており、地域の人たちによる声かけも広がっている。

2つ目は、大田市立志学小学校の「学校でのあいさつ運動を、家庭や地域に広がった活動になるように展開する」である。表題は「学校でできた！じゃあ、家庭へ、地域へ、広げよう！－どうしたら日本一のあいさつができるようになるのか」で、相手がうれしくなるあいさつができる「あいさつ名人」になろうと全校へ呼びかけ、「あい

「さつ名人カード」を利用した取り組みとして始まったことが紹介されている。取り組みは学校から地域へと広がりを見せ、カードは学校編に加えて家庭・地域編がつくられている。さらに、今はまだできていないけれど、「日本一のあいさつの種」をまけばきっと花が咲き実を結ぶという考えで、家庭でも意識を高めてもらうために、「日本一のあいさつの種」についての家族会議の開催を呼び掛け、各家庭からも取り組みについて意見をもらう試みをしたり、地域の人が作曲したオリジナルあいさつの歌が作成され、毎朝登校時に流されたりしている。

②あいさつ運動以外の関連活動

あいさつ運動以外に、さまざまな活動の一環として「あいさつの教育」に取り組んだ事例として、「保護者への働きかけ」以外の3つの観点から5例が紹介されている。

「様々な連携」の観点からは、2つの試みがとりあげられている。ひとつ目は、出雲市の鳶巣コミュニティセンターと鳶巣幼稚園の「地域と保護者との関わりを深めながら、園児が茶道を通して日常生活に必要なふるまいを学ぶ」である。表題は「日常生活で「どうぞ」がさりげなく－鳶巣の宝石箱「抹茶体験でふるまい向上」」で、園児は隣接するコミュニティセンターで月1回抹茶をたしなみながら、礼儀作法のひとつとしてあいさつすることを学んでいる。

2つ目は、奥出雲町の横田中学校区の「中学校区の5校が連携して共通する子ども像をもち、子どもたちの考えを取り入れた「横田しぐさ7ヶ条」の活動を推進する」である。表題は「〔横田しぐさ7ヶ条〕…中学校区の5校が連携！－さらに！3保育所、1幼稚園、3幼稚園も加わった「生活チャレンジシート」」で、小中連携の「こころ生活部会」において生徒指導上の重点項目を5校で相談し、7項目を共通に指導していくことを決定している。それらの項目のひとつに「あいさつ・へんじ」がある。各項目は、それぞれの子どもたちの手により標語化され、中学校では生徒手帳への掲載、小学校では日めくりポスターや校内への掲示を行って意識化が図られている。リーフレットには、八川小学校版の1年生の標語例として、「目を見て 大きな声で へんじ・あいさつをしよう」が掲載されている。

「地域全体での取り組み」の観点からは、出雲市の東コミュニティセンター地区の「コミュニティセンターの呼び掛けで、地域全体で「ふるまい向上島根一」を目指す」が紹介されている。表題は「コミュニティセンターが核！、ふるまい向上を地域全体に！」で、ふるまい向上を軸とした試みのひとつとして「笑顔で元気良くあいさつ・はきものをそろえる」をセンターでの約束にし、「よその子を叱ろう、一人一人の特異なふるまいを教えていこう」と地域全体へ呼びかけている。

「活動の工夫」の観点からは、2つの試みがとりあげられている。ひとつ目は、奥出雲町の八川公民館の「身をもって覚える大切さも必要と考え、身につけてほしいふるまいを明確にした合宿通学を実施する」である。表題は「実は、炊事・掃除・もらい湯が、大切な勉強の場－自立を促す生活体験を重視した合宿通学」で、八川小学校の4年生から6年生の希望者を対象に合宿通学を実施したもので、なかでも毎晩のもらい湯では、初対面の人との会話の中や、もらい湯で家にあがったとき、お風呂に入るとき、さらに帰るときはきちんとあいさつし、自分の気持ちを家の人に伝えましょうということで、あいさつの具体的な言葉を例示している。

2つ目は、松江市の松江一中校区の「生徒会自ら自分たちの生活向上を目指して、考え動き出し、その取り組みが校区の小学校にも広がる」である。表題は「中学生が自ら動いた「こころ♡ほっと運動」－生徒会発信「こころ♡ほっと運動」が小中連携で小学校にも」で、松江一中の生徒会が「みんなが気持ちよく学校生活を送るにはどんなことを心がけていくといいのかを各自が考えて行動しよう」という「こころ♡ほっと運動」を自主的な活動をすすめるなか、この運動を校区の4小学校にも呼びかけることになったもので、実際「児童会・生徒会交流」の場で呼びかけられると、各小学校でもアイデアを活かした取り組みが展開されるようになったものである。

2)『広がっています 島根のふるまいⅡ』より

続いて、平成23（2011）年度に作成されたリーフレット『広がっています 島根のふるまいⅡ』をチェックしてみよう。そこでは、①ふるまい向上の視点で取り組む、②広範囲での取組、③指導する側の考え方の見直し・共通理解、④保護者への支援、の4つの視点から、活動に取り組んだ団体と、活動の「表題」と具体的な取り組みの内容が紹介されている。

①あいさつ運動をとりいれたもの

あいさつ運動に焦点をあてた取り組みは、「広範囲での取組」と「保護者への支援」の視点から3例がピックアップされている。

「広範囲での取組」の視点からは、吉賀町青少年健全育成推進協議会と公民館が中心になって実施している試みに「清流につづけふるまい 日本一」がある。町全体で「ふるまい標語コンクール」を実施し、選ばれた標語をたすきにして各地区に配布し、あいさつ運動で活用している。

「保護者への支援」の視点からは、2つの試みがとりあげられている。ひとつ目は、松江市立津田小学校の試みで、「地域・保護者への働きかけ」がある。ここでは、あいさつに力をいれており、地域・保護者に働きかけ、さまざまな方法を通してあいさつ運動をしている。たとえば、あいさつ運動をPTAと合同で行ったり、四中校区で地域と連携してポスターを作成配布したりしている。また、運動期間中は、中学生が母校の小学校の昇降口であいさつ運動をしたりしている。

2つ目は、松江市にある朋和学園育英北幼稚園の「めあてをもって、親子あいさつカード」の試みがとりあげられている。毎学期にある2週間のあいさつ週間ごとに親子それぞれにあいさつカードを渡して、あいさつをしたかどうかを調べている。各回のあいさつ週間では、めあても作成されている。具体的には、1回目は「相手の目を見てげんきにあいさつをしよう」、2回目は「相手に気持ちが伝わるあいさつをしよう」、3回目は「あいさつの輪を広げよう」があがっている。親子がお互いにカードを見ることで、それぞれにいろいろな気づきがあり、家庭や園以外の場でも気をつける姿が見られるようになり、親自身が子どもに比べて自分のあいさつの声が小さかったことに気づいたり、気持ちよいあいさつや温かい声かけが増えたりしたことなどが報告されている。

②あいさつ運動以外の関連活動

あいさつ運動以外に、さまざまな活動の一環として「あいさつの教育」にとりくんだ事例として、「保護者への支援」以外の3つの視点から3例が紹介されている。

「ふるまい向上の視点で取り組む」の視点からは、雲南市にある県立三刀屋高等学校の「学校独自の指導資料を活かして」で、学校独自に作成した指導資料『Step by Step ～日々の生活の中で～』を用いて、長年活動してきていることが紹介されている。この冊子では、あいさつをはじめ9つのテーマが取りあげられ、年9回の授業で活用されている。

「広範囲での取組」の視点からは、2つの試みが紹介されている。ひとつ目は、大田市立五十猛小学校の試みで、「青少年健全育成宣言を軸に連携」がある。社会福祉協議会やまちづくりセンターと連携し、以前からある「五十猛町青少年健全育成宣言」を活用してふるまい向上に取り組んでいる。標語コンクールの実施や「ふるまい向上カレンダー」を地域全戸に配布するなどして、あいさつがあふれる温かい学校風景になったことが報告されている。

「指導する側の考え方の見直し・共通理解」の視点からは、益田市の美濃公民館の「恒例の主催事業の中で」がある。公民館主催事業である見守り事業として、「登下校時の安全確保・声かけ・挨拶の励行」の3点セットであいさつ向上を目指していることがとりあげられている。

4. 「ふるまい向上プロジェクト」の成果

では、こうした活動の結果、プロジェクトの成果はでたのだろうか。あいさつ関連の成果に注目しよう。

1) 平成23(2011)年「学校への「ふるまい向上プロジェクト」に係る取組状況調査」の結果

プロジェクトの成果については、平成23(2011)年9月に「学校への「ふるまい向上プロジェクト」に係る取組状況調査」が実施され、その結果はリーフレット『広がっています 島根のふるまいⅡ』で報告された。

調査項目は3つあるが、そのうちのひとつで、あいさつが以前よりよくなったかが尋ねられた。それによると、平成21(2009)年度（ふるまい向上プロジェクトに取り組む前）と比べて児童生徒のあいさつがよくなったと回答した学校は、小学校が38.5%、中学校が38.2%、高等学校が26.2%、特別支援学校が41.7%で、プロジェクトの成果がでていることが報告されている（表3）。

表3 児童生徒のあいさつはよくなったか（平成23年度）

	小学校	中学校	高等学校	特別支援学校	全体
対象校数	234	102	42	12	390
回答校数	231	102	42	12	387
よくなった	89	39	11	5	144
%	38.5	38.2	26.2	41.7	37.2

*：県教委の既発表値は%のみ（今回、数値が初公開）。

2) 平成24（2012）年「ふるまい向上プロジェクトに関するアンケート調査」の結果

翌平成24（2012）年9月に実施された「ふるまい向上プロジェクトに関するアンケート調査」は、自由記述による回答を整理する形でまとめられ、その結果はリーフレット『広がっています 島根のふるまいⅢ』で報告された。

各学校等の取り組みの成果は、①保育所幼稚園、②小学校、③中学校、④県立高等学校、⑤県立特別支援学校、⑥公民館、⑦教職員保育士、の7領域にわけて、現場からの声がまとめられた。現場からの声の扱いは一様ではないが、領域ごとに＜あいさつ（・マナー）＞＜生活習慣など＞＜豊かな心＞＜生徒＞＜保護者や地域＞＜各種事業＞などの項目が設けられて随時紹介され、最後に＜活動へのコメント＞が加えられている。

①保育所幼稚園での成果

「保育所幼稚園」の＜あいさつ＞欄には、「ふるまい推進指導資料の『きらきらふるまい みんなにここにこ』の繰り返し使用で、子どもたちから挨拶などが自然に出てくるようになってきていること」や「年長さんが張り切って挨拶運動当番をするのをみて、みんなが積極的になってきていること」「子どもが自分から挨拶などをしてきたに子に声をかえすことで、少しずつ自分から挨拶する子が増えてきていること」などがあがってきている。また、＜小学校からの声＞欄が特別に設けられ、「地域全体の取組により入学直後から新入生の挨拶がよく、早い段階から小学校生活への適応がみられる」という声が紹介されている。

＜活動へのコメント＞では、「挨拶に関する取組は非常に多く、明るく元気のよい挨拶が増えてきているという回答が多くありました。また、それにより地域からも褒めていただいたり、つながりが深まったりしているという成果も報告されています。その他に意識した点として、「カードなどの利用」「職員のまねをして」「校種間の連携」「地域との交流」「名前を言い、視線を合わせる」「繰り返し」などの言葉もありました」とある。

それから、＜保護者や地域＞欄では、「挨拶運動、すこやか週間、一日保育士体験などを通して保護者の態度が変わった。生活リズムの乱れも極めて少なくなった。子どもたちの取組に感化される面もある」「子どもが挨拶をするようになり、親にも意識が芽生えてきて、自然に会話も増えている」「地域へ出かけた際、子どもも職員も積極的に挨拶するようにしたことで、地域の方が親しく思ってくださるようになった」が紹介されている。

＜活動へのコメント＞には、「生活習慣改善の啓発を続けること、子どもの取組の様子や成果をこまめに知らせることで、家庭の意識も変わりやすいようです。ふるまいの大切さは伝えることができても、実行に移すことができにくいところへは、取り組みやすいことから具体的な方法を伝えるなどの支援をしていくことが必要なことのようにです」と指摘されている。

②小学校での成果

「小学校」の＜あいさつ＞欄では、「気持ちのよい挨拶が聞かれるようになったという声を地域からいただくようになった」や「少し離れたところからでも挨拶をする児童が多い、積極的に人と関わろうとする姿勢が芽生えている〔原文ママ〕」「地域の方々に学習や活動に協力していただく機会を多く設けることで、日ごろの感謝の気持ちを登下校時の挨拶で表せるようになってきている」「小中一貫教育のひとつとして「自分から進んで挨拶ができる子」の育成を目指して重点週間を設けるとともに、アンケートによる実態調査を行った結果に基づき、進んで挨拶できるよう励ますことで、気持ちよい挨拶を自分からする児童が増えてきた」「児童会活動に「ふるまい委員会」を加え、「挨拶プロジェクト」などを企画し、意欲を持って取り組んでいる」などが紹介されている。

＜活動へのコメント＞では、「明るく元気のよい挨拶は、県内の小学校で増えてきているようです。それにより

気持ちのよい一日のスタートが切られているという報告もあります。意識した点として、「職員率先」「校種間の連携」「地域・保護者との連携」「児童会の取組」などの言葉が多くありました」と報告されている。

③中学校での成果

「中学校」の〈あいさつ・マナー〉欄では、「挨拶は何のためにするのか、どんなことにつながるかを生徒同士で話し合う場を設けた。以前に比べ生徒同士の挨拶が増え、お互いに気持ちを伝えやすい雰囲気生まれてきている」「地域だけでなく、高校、大学とも連携し取り組んだことで、地域の会合等で、挨拶のよさをほめてもらえるようになった」「中学生が出身小学校で「小中交流挨拶運動」をし、地域でも挨拶をする生徒が増え、地域からも挨拶をよくすると聞いている」などがとりあげられている。

〈活動へのコメント〉では、「挨拶運動に関しては、小中連携、生徒会活動という言葉が多くありました。中には特徴的なものとして、児童会と生徒会の交流を持つというものがありました。また中学校らしく部活動の活用という例も多くありました。職場体験は、やはりふるまい向上の大きなきっかけとなるようです。それに合わせたマナーやコミュニケーションスキルの研修などの取組も多くあります」と締めくくられている。

④県立高等学校での成果

「県立高等学校」の〈生徒〉欄では、あいさつ関係は「1年生入学当初に接遇指導を実施し、生徒はコミュニケーションにおける要点を理解し、日々の生活での挨拶や話し方により影響を与えている」と「「挨拶」の励行により、来客や地域の方への挨拶もよくなり、時々お褒めの言葉もいただく。校内では定着している」の2つの声がとりあげられている。〈活動へのコメント〉では、「校区が広がり地域とつながることが難しい中で、さまざまな活動が工夫して行われています。また、進路を意識した、接遇やコミュニケーションの研修も多くあります」とコメントされている。

それから、〈保護者や地域〉欄では、「保護者による朝の挨拶運動で、保護者の皆さんの生徒理解にもつながり、家庭での生徒と保護者の会話の糸口になるなど良好な効果があった」が紹介されている。

〈活動へのコメント〉では、総括として「活躍する生徒の姿や学校での取組の情報を家庭や地域に発信すること、様々な取組に学校外の方に関わってもらうことで、生徒理解、学校理解が深まり、より有効な教育活動が展開できるようです」とある。

⑤県立特別支援学校での成果

「県立特別支援学校」では、とくに欄は設けられていないが、あいさつ関係は「学校間交流をすることで、集団の中で挨拶をしたり、お礼や感想を言ったり、聞いたりして、集団の中でのふるまい方を理解しつつある」と「生徒会執行委員会で数年前から「挨拶運動」を行っている。週3回続けることで、生徒たちの声も大きくなってきた。子どもたちを送ってこられる保護者の方とも気持ち良い交流ができつつある」が紹介されている。

〈活動へのコメント〉では、「できるところから確実にという取組と、校外の人とのつながりなどから学ぶという取組が多いようです。日々の学習と、社会生活に役立つふるまいを身につけることが直結しています」とある。

⑥公民館等での成果

「公民館等」の「各種事業（子ども中心）」欄では、「「挨拶」などを場面に応じて口やかましいほど職員がしつけることで、一言注意しておけば、子ども同士で自主的に注意し合ったり、下級生への指導場面も見られるようになった」が紹介されている。

それから、「地域」欄では、「ふるまい向上の視点を青少年健全育成活動にとりいれ、挨拶運動などを実施するとともに、各種会合で住民に対してこの活動の主旨を伝えることで子どもたちのあいさつがよくなっている」や「青少年の非行・被害防止全国協調月間にちなみ、家族ぐるみ、地域ぐるみで挨拶運動を徹底することを図るために、各家庭や各自治会公民館に声かけポスターを掲示したり、標語入りティッシュペーパーを各家庭に配布したりする活動を行ったことで、大人から子どもにいたるまで以前にも増して、積極的に挨拶するようになっている」

などがあがっている。

＜活動へのコメント＞では、各欄別のコメントではなく、全体のコメントとして「子どもへの働きかけだけでなく、保護者・地域への働きかけも意識して取り組んでいただいている様子がわかります」が与えられている。

⑦教職員保育士にとっての成果

「教職員保育士」の欄は、公民館等を除いた各学校等の教職員・保育士からの声がまとめられている。あいさつ関係では、「挨拶を心がけたことでコミュニケーションがとりやすくなった」「職員間のあいさつや情報共有で、連携がよくなり、子どもや保護者への対応がよくなった」「職員が生徒にあいさつの声かけをすることで、生徒と職員のコミュニケーションが密接となり、さまざまな指導がスムーズにできるようになった」などの声がでていた。

＜活動へのコメント＞では、「子どもたちに接していくのに、ふるまい向上の意識を持つ、共通理解をする、ということはやはり大切なことのようにです。また、「指導するにあたって、自分たちを振り返った」という回答も多くありました。特別なことではなく、日常の取組の中で大切にしていこうという考えが、広まっています」とある。

以上より、「ふるまい向上プロジェクト」は県民への周知が進んだと判断され、第1期プロジェクトは終了し、プロジェクトは次の段階を迎える。

Ⅳ. 第2期「しまねのふるまい推進プロジェクト」〔平成25（2013）年度以降、現在まで〕

1. 概要

「ふるまい向上プロジェクト」は、平成25(2013)年度に「しまねのふるまい推進プロジェクト」と名称が変更され、2期目の活動に入った。この取り組みが成果をあげていくためには、社会全体の取り組みとして、直接子どもたちやその保護者に働きかけ支援していく部分と、大人自身が子どもたちのよい手本となるように自らの「ふるまい」を省みて社会全体の「ふるまいの定着」を進めていく部分が必要であるとされ、そのためには家庭・保育所・幼稚園・学校・地域が連携して社会全体で取り組んでいくことが大切だと考えられた。

これを受けてプロジェクトは、子どもとその保護者、さらにすべての年代に「ふるまい」が定着することを目指した県民運動として展開されていく。期待される効果としては、①自立して生きる、人とともに生きることができるとなる人材育成、②社会、地域に貢献できる人材の育成、③学力の向上、④問題行動の減少、⑤住みよい島根づくり、があげられている。

プロジェクトの事業としては、①学校教育の中でのふるまいの定着、②保護者、家庭、地域への働きかけ、③校種間の連携強化、の3分野において、各種事業やプロジェクト関連の活動が実施されている。

＜学校教育の中でのふるまいの定着＞を目指す活動には、平成25（2013）年度にはじまった「しまねのふるまい体験活動推進事業」がある。事業内容としては、児童生徒を対象に、①生活体験を重視した長期宿泊体験活動、②ふるまい定着を意識した体験活動、③学校・家庭・地域との共同による推進活動、の3つがあげられている。①の長期宿泊体験活動は、公民館、地域の宿泊可能な施設、宿泊体験活動ができる施設などで、炊事、洗濯、掃除などの生活体験を取り入れた、連続する3泊4日以上の宿泊体験とし、教育課程に位置づけて実施されている。②の体験活動は、1学年以上を対象とし、ふるまいの意識を高め、ふるまいの定着を図る体験活動を計画的に実施し、活動は継続的あるいは発展的な活動となることが望ましいとされている。③の共同活動は、学校を核として家庭や地域が密に連携し、地域全体に「しまねのふるまい」推進機運を醸成するための活動を継続的に実施するもので、教科課程外で家庭や地域等が連携して行う活動となっている。共同活動の事例のひとつとして「あいさつ運動」がとりあげられており、標語等を作成したりして、地域全体でふるまいの定着を図ることが求められている。

＜保護者、家庭、地域への働きかけ＞を行う活動では、県教委の社会教育課が行うものとして、すでにプロジェクトの第1期にスタートしていた「親学プログラムの普及・啓発」が継続実施されるとともに、同じく第1期に

はじまった「公民館ふるまい向上事業」が「公民館ふるまい推進事業」と名称を変更して継続実施されている。まず、「親学プログラムの普及・啓発」では、各市町村における親学プログラムや親学ファシリテーターを活用した取り組み支援が行われている。また、「公民館ふるまい推進事業」では、公民館を拠点とした活動支援が行われている。事業内容としては、①保護者を対象として、ふるまいの向上・定着を図る活動、②子どもと親世代が、地域住人等と関わりながら、ふるまいの向上・定着を図る活動、③家庭や地域におけるふるまいの向上・定着を図る活動、の3つがあげられている。それから、社会教育課が行う以外のものとして、「企業等との連携」がある。そこでは、平成25(2013)年度からしまねのふるまい推進協議会が広報・啓発として協力団体用ステッカー等の配布し、企業等に掲示を促したり、県事業の有効活用が行われたりしている。

＜学校教育の中でのふるまいの定着＞を目指す活動と＜保護者、家庭、地域への働きかけ＞を行う活動の両者をまたぐものに、プロジェクトの第1期の平成24(2012)年度にはじまった「ふるまい向上指導員派遣事業」があり、名称を「ふるまい推進指導員派遣事業」に変更して継続実施されている。事業内容としては、「しまねのふるまい」を推進するため、市町村単位、各保育所・幼稚園・学校単位のPTA研修や職員研修、子育てサークルの親子活動、公民館等や企業・団体の研修会に指導員を派遣し、指導や助言を行っている。

＜校種間の連携強化を促す活動＞には、「幼保小連携講座の実施」と「ふるまい推進指導資料の配布」と「キャリア教育の推進」の3つがある。「幼保小連携講座」では、平成26(2014)年度から国の事業を活用して、幼保小の接続、連携のための能力開発研修講座が実施されている。「ふるまい推進指導資料の配布」では、プロジェクトの第1期に作成された5歳児用と小1用の指導資料が引き続き配布されている。なお、「キャリア教育の推進」は、具体的な事業をあらわしたものではなく、キャリア教育に関する島根県の考え方をまとめたもので、キャリア教育では子どもの発達段階に応じた縦の連携(学年間や学校種間の緊密な協力や円滑な接続)が重要であることから、異校種の連携を強め、ふるまいなどの心情や実践力を高めていく方針(方向性)を示している。

2. 広報・啓発活動

プロジェクトでは、家庭・学校・地域の連携を促進するために、平成25(2012)年11月にしまねのふるまい推進連絡協議会によって、ポスター「大切にしたいしまねのふるまい」が作成され、配付された。

ポスターの中心には、「大切にしたいしまねのふるまい」の表題が、送りがなつきで表記されている。それを囲む形で、各校で取り組んでほしい基本的なことのなかから、日常生活で常に意識でき、達成が自分自身で確認できることとして3項目がとりあげられている。ポスターは、保育所・幼稚園用、小学校用、中学校・県立学校用の3種類が用意されたが、それら3項目の内容はほとんど同じである。保育所・幼稚園用は、ひらがな表記で、①あいさつ・へんじをしよう、②ありがとうをつたえよう、③きまり・やくそくをまもろう、となっている。また、小学校用は、送りがなつきで、①あいさつ・返事をしよう、②ありがとうを伝えよう、③きまり・約束を守ろう、となっている。さらに、中学校・県立学校用は、漢字やカタカナ表記を交えて、①挨拶・返事をしよう、②感謝を伝えよう、③ルール・マナー・約束を守ろう、と記載されている。

これ以外の活動としては、ホームページの作成、リーフレットやポスターの配布、保護者用のチラシ「ふるさとしまねの宝!!」の配布、県政情報誌の作成、企業との連携などがある。

3. 「あいさつの教育」の取り組み状況 ～「しまねのふるまい推進プロジェクトに関するアンケート調査」の結果

ところで、ふるまい推進の取り組みには、あいさつ運動、啓発活動、ふるまい目標の設定、ふるまいの日の設定、礼儀・作法等の研修、職員研修、親子活動、PTA研修、宿泊体験などの各種体験活動など、さまざまなものがある。

これらの活動のなかで、あいさつ運動はどれくらい実施されているのだろうか。平成25(2013)年度以降、毎年県教委から取り組みの実施状況として「しまねのふるまい推進プロジェクトに関するアンケート調査」の結果が報告されている。それによると、あいさつ運動は、数ある取り組みのなかで、毎年トップの実施率で抜きんでいる。

とはいえ、この調査は各年度で調査方法や集計方法が異なっていたため、比較検討するには難があった。このため、経年推移をみやすくするために県教委からデータを提供していただき、あいさつ運動関連のものに焦点化して表を作成し直し、改めて検討することにした。なお、これまでの調査報告は%レベルでのみが発表されていたが、ここでは実数も明らかにするとともに、これまで未発表だったが現時点で公表可能とされたデータを追加

発表することが認められたので、これらを追記している。

1) あいさつ運動の実施状況

まずは、あいさつ運動の実施率の推移である（表4）。プロジェクト開始当初の平成25（2013）年度のデータでは、保育所は5割を切り、幼稚園は8割弱だった。平成29（2017）年度の最新データでは、両方あわせた数値での発表となっているが、8割弱となっている。保育所数が幼稚園数の約3倍であることを考えると、保育所の実施率が大幅にあがっているようである。小中学校は、当初から近年に至るまで80%半ばから90%半ばの値となっている。県立学校は、特別支援学校の実施率がやや低い。調査対象校の母数が小さく、加えて任意回答の調査の場合は数値の変動が大きくなりやすいというらみがあるが、おおよそ60%後半から80%半ばあたりで数値が推移しているようである。公民館等は、プロジェクト開始2年目までのデータにとどまるが、いずれも4割弱となっている。

全体的にみると、あいさつ運動が活発なのは、まずは小学校や中学校で、それに幼稚園が続いている。

表4 あいさつ運動の実施状況

		保育所・幼稚園		小学校	中学校	県立学校		公民館等	全体
		保育所	幼稚園			高等学校	特別支援学校		
平成25年度	対象校数	293	98	220	100	39	12	327	1089
	回答校数	168	95	220	100	39	12	146	780
	実施校数	78	72	197	93	31	3	57	531
	%	46.0	76.0	90.0	93.0	79.0	25.0	39.0	68.1
平成26年度	対象校数	292	99	215	99	38	12	299	1054
	回答校数	143	82	215	99	38	12	128	717
	実施校数	61	64	203	89	32	6	48	503
	%	42.7	78.0	94.4	89.9	84.2	50.0	37.5	70.2
平成27年度	対象校数	—	—	210	98	50	—	—	358
	回答校数	—	—	208	98	47	—	—	353
	実施校数	—	—	193	95	40	—	—	328
	%	—	—	92.8	96.9	85.1	—	—	92.9
平成28年度	対象校数	—	—	205	98	50	—	—	353
	回答校数	—	—	182	88	46	—	—	316
	実施校数	—	—	172	74	31	—	—	277
	%	—	—	94.5	84.1	67.4	—	—	87.7
平成29年度	対象校数	380	—	203	98	50	—	—	731
	回答校数	109	—	153	65	28	—	—	355
	実施校数	84	—	149	58	19	—	—	310
	%	77.0	—	97.0	89.0	68.0	—	—	87.3

*：平成25年度から27年度までは、小学校・中学校・県立学校（高等学校・特別支援学校）は悉皆調査（ただし、平成27年度の回収率は100%ではない）。それ以外はすべて、任意の回答。

**：県教委の既発表値は%のみ（今回、数値が初公開）。なお、既発表値では、平成25年度と平成29年度は回答があった学校数に対してあいさつ運動を行っている学校数の割合で数値がだされていたが、平成26年度から28年度は「ふるまい」にかかわる10項目の取り組みのなかでの割合でだされており、数値の扱いが異なっていた。このため、経年で比較するため、今回平成25年度と平成29年度で採用した集計方法で再集計している。

2) ポスター「大切にしたいしまねのふるまい」の活用状況

続いて、ポスター「大切にしたいしまねのふるまい」の活用状況をみよう（表5）。当初保育所、幼稚園、小学校での活用率は8割半ばぐらいだったが、最新データでは7割程度にまで落ちてきている。中学校は、だいたい7割台をキープしている。県立学校は、毎年6割前後だったのが、最新データでは3割にまで落ちこんでいるが、これは回答が任意になったことで、回答数がかかなり落ちたことが影響しているのかもしれない。

全体的にみて、活用率が落ちてきているのが気になるが、もしかしたら毎年同じものが使用されてきているため、現場では既視感が強く、飽きがきつつあるのかもしれない。

表5 ポスターの活用状況

		保育所・幼稚園		小学校	中学校	県立学校		全体
		保育所	幼稚園			高等学校	特別支援学校	
平成25年度	対象校数	293	98	220	100	39	12	762
	回答校数	168	95	220	100	39	12	634
	活用校数	140	82	189	71	27	6	515
	%	83.3	86.3	85.9	71.0	69.2	50.0	81.2
平成26年度	対象校数	292	99	215	99	38	12	755
	回答校数	143	82	215	99	38	12	589
	活用校数	111	72	186	79	21	7	476
	%	77.6	87.8	86.5	79.8	55.3	58.3	80.8
平成27年度	対象校数	—	—	210	98	50		358
	回答校数	—	—	208	98	47		353
	活用校数	—	—	168	76	31		275
	%	—	—	80.8	77.6	66.0		77.9
平成28年度	対象校数	—	—	205	98	50		353
	回答校数	—	—	182	88	46		316
	活用校数	—	—	147	66	31		244
	%	—	—	80.8	75.0	67.4		77.2
平成29年度	対象校数	380		203	98	50		731
	回答校数	109		153	65	28		355
	活用校数	76		110	51	9		246
	%	69.7		71.9	78.5	32.1		69.3

*：平成25年度から27年度までは、小学校・中学校・県立学校（高等学校・特別支援学校）は悉皆調査（ただし、平成27年度の回収率は100％ではない）。それ以外はすべて、任意の回答。

**：県教委の既発表値は％のみ（今回、数値が初公開）。なお、既発表値では、平成25年度と平成29年度と、平成26年度から28年度とでは、無回答の処理が異なっていた。このため、経年で比較するため、今回平成25年度と平成29年度で採用した集計方法で再集計している。

3) 指導資料の活用状況

最後に、ふるまい推進指導資料の活用状況をみてみよう（表6）。活用率は、当初から保育所は8割前後で、幼稚園は9割前後で推移していそうである。また小学校は、9割以上をキープしていそうである。

表6 指導資料の活用状況

		保育所・幼稚園		小学校	全体
		保育所	幼稚園		
平成25年度	対象校数	293	98	—	391
	回答校数	168	95	—	263
	活用校数	137	85	—	222
	%	81.5	89.5	—	84.4
平成26年度	対象校数	292	99	215	606
	回答校数	143	82	215	440
	活用校数	113	76	197	386
	%	79.0	92.7	91.6	87.7
平成27年度	対象校数	—	—	210	210
	回答校数	—	—	208	208
	活用校数	—	—	191	191
	%	—	—	91.8	91.8
平成28年度	対象校数	—	—	205	205
	回答校数	—	—	182	182
	活用校数	—	—	171	171
	%	—	—	94.0	94.0
平成29年度	対象校数	380		203	583
	回答校数	109		153	262
	活用校数	93		145	238
	%	85.3		94.8	90.8

*：小学校は、平成26年度と平成27年度は、悉皆調査（ただし、平成27年度の回収率は100％ではない）。保育所と幼稚園はすべて、任意の回答。

**：県教委の既発表値は％のみ（今回、数値が初公開）。なお、既発表値では、平成25年度と平成29年度と、平成26年度から28年度とでは、無回答の処理が異なっていた。このため、経年で比較するため、今回平成25年度と平成29年度で採用した集計方法で再集計している。

***：平成25年度のデータは、今回初公開。

4. 「しまねのふるまい推進プロジェクト」の成果

「しまねのふるまい推進プロジェクトに関するアンケート調査」の平成 25（2013）年度版と平成 29（2017）年度版では、活動の実施責任者が報告した、取り組みの成果についての自由記述が抜粋されて収録されている。ここでは、あいさつ運動をはじめとする、あいさつ関連の報告に限定してとりあげたい。なお、各年度版の紹介では、それぞれ〔自由記述一覧〕を掲載しているので、参照していただきたい。

1) 平成 25（2013）年度版の場合

平成 25（2013）年度版は、プロジェクト 1 年目の結果をまとめている。そこでは、プロジェクト実施について、「変容と成果」と「課題」の 2 つの観点からまとめられている。

①変容・成果

変容と成果については、①子どもについて、②職員について、③保護者・地域について、の 3 つの領域で整理されている。

＜子どもについて＞は、まずは「なんらかのメディアを使った試み」が功を奏している様子が窺える。保育所・幼稚園ではシール貼り、小中学校ではあいさつカードや生活目標の振り返りカードの活動、標語などの利用がみられる。それから、小中学校や公民館等でのあいさつ運動では、学校や地域などが連携してみんなで取り組む活動で成果がでているようで、あいさつへの意識を高めることに寄与することが報告されている。

＜職員について＞は、あいさつを意識化し、自分からあいさつなどの声かけを心がけることで、さまざまな人とのコミュニケーションや人間関係が活発化しただけでなく、学校の雰囲気や地域の環境がよくなった様子が窺える。

＜保護者・地域について＞は、保護者のあいさつ意識の向上がみられることが報告されている。

〔自由記述一覧〕

a) 子どもについて

＜保育所・幼稚園＞

- ・シールを貼る時だけでも、あいさつ、相手の思いやり等、やる気になっている。
- ・ふるまい向上のお話を聞くことで、あいさつができるようになり、相手を思いやる心が育っている。
- ・地域の方との交流、園外保育などを行うことで、挨拶の習慣が身に付き、人や自然に対する思いやりの心が育ってきている。

＜小・中学校＞

- ・ふるまいの日を設定し、あいさつ名人、ありがとうカードといった活動をすることで挨拶をしようという気持ちや、友だちとのかかわりを振り返る気持ちが育ちつつある。
- ・あいさつ運動を継続することによって、年度当初に比べ、あいさつする子が増えてきている。中学生や地域の方も定期的に参加してもらい、あいさつを通して感謝の気持ちが育っている。
- ・生活目標の振り返りカードを使って自己チェックすることで「あいさつや言葉遣い」、「スリッパ揃え」などの意識が高まった。
- ・小中合同あいさつ運動をすることによって、誰に対してもさわやかに挨拶しようとする意識が高まっている。
- ・“THANKS”（手伝い・履き物・あいさつ・本・校歌・掃除）という標語を作って呼びかけたことで、多くの生徒が意識し、実践している。

＜県立学校＞

- ・あいさつ運動をすることで、新入生が入学当初よりも挨拶をするようになった。「場を清める」指導をすることで、ロッカーの上に荷物を置きっぱなしにする生徒が少なくなった。
- ・挨拶をよくするようになった。校内美化に努めている。
- ・あいさつや身だしなみなどで、相手を思いやる意識を言葉に表すように取り組んでおり、来校者からも気持ち良い生徒たちとの評価を受けている。

- ・おじぎやあいさつ、相手との話し方を練習することで、相手が気持ちよく過ごせるような意識が育っている。

＜公民館等＞

- ・「子ども広場」等の事業で来館する度に、挨拶・靴をそろえるなどの指導をすることで、自分から進んでそれをするようになり、礼儀・作法を重んじる心が育ってきている。
- ・月2回のあいさつ運動の成果として、運動日以外でも小中学生の方から挨拶をするようになった。
- ・「あいさつをしましょう・はきものをそろえましょう・ポイ捨てはやめましょう」の目標は各種研修や体験活動により、それぞれがよくなってきている。
- ・学校と連携してあいさつなどのふるまい向上に取り組んだことで、少しずつ子どもの挨拶が良くなってきている。
- ・見守り隊のあいさつ運動や子どもの教室での様々な活動を行う中で、子ども達は地域住民に見守られている、大切にされているという意識を持つようになってきている。

b) 職員について

＜保育所・幼稚園＞

- ・子どもや保護者に対する挨拶や言葉遣いなど、相手の受け止めに意識しながらするようになった。
- ・子どもや保護者に挨拶や話をする時は、目と目を合わせて気持ちのよい対応を心掛けるようになった。保育士同士のコミュニケーションも大切にするようになった。

＜小・中学校＞

- ・生徒があいさつをする前に教職員が声をかけることが多くなった。
- ・教職員とPTAで連携してあいさつ運動等を行うことで、地域で児童生徒を見守り、育てようとする雰囲気が高まった。
- ・丁寧な言葉遣い、挨拶を心がけ、生徒の手本となるよう意識して行動するようになった。全教職員が共通の意識を持つことで、取り組みの成果が上がっている。

＜県立学校＞

- ・あいさつ運動の効果は生徒だけではなく、教職員も明るい校内環境づくりを心がけるようになってきている。
- ・来客者に対して先に挨拶をする教職員が多くなった。また、多くの教職員が、電話や保護者に対して丁寧に対応できるように心がけるようになった。
- ・教職員一人一人があいさつや礼儀などについて指導する立場であるため、普段から生徒の手本となるように心がけている。

＜公民館等＞

- ・子ども達の良い見本となるよう、私たちも元気に明るい挨拶を心がけるようになった。
- ・職員は相手の挨拶がない場合でも、こちらから積極的に声をかけて対応している。それによって“ふるまい”の輪が少しでも広がっていけば良い。
- ・毎朝のミーティングで、「笑顔であいさつ・来館者への気遣いを・親しみの中にも感謝と敬意」の3つの言葉を唱和して、来館者の方や電話してこられた方へも常に丁寧に対応するよう心がけるようになった。
- ・年間37,000人余りの方が来館。職員も日頃から笑顔で挨拶、来館者への気遣い等に心掛けています。

c) 保護者・地域について

＜保育所・幼稚園＞

- ・子どもが玄関で挨拶当番を行っていることで、丁寧に挨拶する保護者が増えた。ふるまいの取組みをクラス便りで発信したことで、意識が変化してきた保護者もいる。
- ・保護者同士で挨拶を交わしあう場面が少しずつ増えてきたように思える。
- ・毎月のお便りに、ふるまいの目標（挨拶、返事をしよう／お手伝いをしようなど）を掲げることで、少し意識して声をかけたり、子どもに接したりする姿がある。

＜小・中学校＞

- ・あいさつ向上を保護者に呼びかけることで、家庭内での気持ちのよいあいさつを心がける保護者が増えてきた。

- ・定期的に行われるあいさつ運動一斉行動日に、中学生も参加したことにより、保護者のあいさつ意識を高め、PTA 活動として家庭でのあいさつ運動に発展した。
- ・地域の方から、中学生のあいさつについて、お褒めのお手紙を何度かいただいた。

＜県立学校＞

- ・地域・来校者より生徒が良くあいさつをするとほめていただいた。保護者・地域の方も生徒・教員に対してよくあいさつをされる。

＜公民館等＞

- ・マナーなどがなかなか浸透できない今の保護者世代だが、少しずつ挨拶や言動がよくなってきたように思う。
- ・今まで挨拶をあまり交わすことのなかった保護者が、地域の人に積極的に挨拶をされるようになった。感謝の心を言葉で伝えられるようになった。保護者のマナー、意識が向上したように感じる。
- ・取り組みを続けることで、挨拶等のふるまいが積極的に行われるようになった。

②課題

報告されたのは保育所・幼稚園と公民館等での2つの事例にすぎないが、そこで共通する課題はあいさつがなかなか定着しないことにある。

〔自由記述一覧〕

＜保育所・幼稚園＞

- ・子どもたちに、挨拶についてその都度話をしているが、なかなか定着しない。自分の方から挨拶できるよう、これからも繰り返し指導していく必要がある。

＜公民館等＞

- ・「あいさつ運動」もその時だけでの挨拶で終わり。「いつもでも」「どこでも」といったような日々の挨拶の定着はなかなか出来ていない。

2) 平成 29 (2017) 年度版の場合

平成 25 (2013) 年度版では、課題としてあいさつがなかなか定着しないことがとりあげられていた。

平成 29 (2017) 年度版では、その原因のひとつとして、小学校では「大人のあいさつ」に問題があることが指摘されている。中学校では、あいさつが依然として定着しないことが報告されている。その際、小規模校の抱える課題として固定化された集団問題や、大きな声であいさつすることの難しさが指摘されたりしている。これは思春期の成長課題とからみあっているので、すぐに解決する策を見出すのは難しいかもしれない。

そのひとつの答えとして、県立学校からの回答にあるように、あいさつ運動を引き続いて行っていくということがあるだろうが、具体的にどうしたらいいかについてはなにも書かれていない。

〔自由記述一覧〕

＜小学校＞

- ・「まずは、大人からしっかりと！」がどんどん定着しないといけないと考える。学校現場にいと、年々、大人のあいさつや言葉づかいがよくない姿をみるが多くなっていると感じる。
- ・子どもの「ふるまい」は向上したが、来校時の保護者のあいさつや授業公開での態度等が課題。懇談等で啓発を行っていく必要がある。

＜中学校＞

- ・ふるまいの取り組みの意識作りのためにも、この活動だけは全県で必ず取り組むものがあると良いのではない。感謝を伝える作文のコンクールなど、ふるまいの取り組みを表彰できる場面があると良い。ふるまい推進に関する本校の課題は、ふるまいの質をさらに上げていくということが挙げられる。本校生徒は、地域活動に根差したふるまい体験活動を自主的・主体的にかつ積極的に行っており、あいさつ、ルールやマナーの向上は確実に図られている。しかし、おとなしい生徒が多く、小規模校ゆえの固定化された集団のせい、大きな声

であいさつや返事をするのが苦手である。これは、生徒の気質の部分でもあるので劇的な改善を図ることは難しいと考える。よって、心を込めたあいさつや場に適したあいさつなど、あいさつの質の向上を本校の課題として引き続き取り組んでいる。

- ・本校の重点目標として“あいさつ・掃除の強化”を掲げて活動や指導を行ったが、強化週間が終わるとなかなかできなくなり、定着が図れていないことが課題である。日々の積み重ねが必要でこれからも継続していきたいと思う。

<県立学校>

- ・あいさつは、コミュニケーションの第一歩であり、社会へ出る前の生徒が学ぶ高等学校では必須のスキルである。今後も挨拶運動を続けていきたい。

5. 「しまねのふるまい推進プロジェクト」の社会的評価

「しまねのふるまい推進プロジェクト」は、平成26（2014）年5月に県単位で行われている「あいさつの教育」関係の政策として全国知事会先進政策バンクに登録された¹⁴⁾。

先進政策バンクとは、「都道府県同士がそれぞれの先進的な取組を提案・共有し合い、良いものを広げるとともに、切磋琢磨により創造性豊かな発想に繋げる情報提供の場として活用することを目的にし、インターネットを通じて事例の収集及び閲覧、分野別や団体別などの分類による検索を行えるようにしたもの」である。

平成30（2018年）8月現在で、先進政策バンクには「あいさつの教育」関係の政策として先進的とされる政策が10個登録されているが、「しまねのふるまい推進プロジェクト」はそのひとつで、一定の社会的評価を得ているといえるだろう（表7）。

表7 「あいさつの教育」関係の先進政策

分野	都道府県	タイトル	登録日	更新日
教育・文化	福岡県	家庭教育の充実	H18年12月12日	H30年4月25日
教育・文化	大阪府	「こころの再生」府民運動～見つめ直そう！大切な5つのこころ	H18年12月27日	H28年5月6日
教育・文化	愛知県	魅力と活力のある県立高校づくりを目指して	H21年12月2日	H21年12月2日
教育・文化	三重県	生徒の夢の実現に向けたキャリア教育の推進	H24年5月9日	H24年5月9日
商工・労働 教育・文化	三重県	生徒の夢かなえよう！	H25年5月7日	H25年5月8日
教育・文化・ 人口減少対策	徳島県	徳島モデルの小中一貫教育「チェンスクール・パッケージスクール」	H26年4月28日	H30年4月10日
教育・文化	岡山県	あいさつ日本一！おもてなしの心を育む県下一斉あいさつ運動の展開	H26年5月29日	H26年5月29日
教育・文化	岡山県	厳しい学校でも成果を上げている取組を実施する学校を応援します！	H26年5月29日	H28年5月20日
教育・文化	島根県	大切にしたいしまねのふるまい	H26年5月30日	H30年5月17日
教育・文化	岡山県	「教育県岡山」の復活に向けた学校警察連絡室の創設	H28年5月10日	H28年5月10日

V. おわりに

1. 青少年の「あいさつの再社会化」に向けて

本論では、島根県の「あいさつの教育」の実態を明らかにするとともに、青少年の「あいさつの再社会化」を促すためのヒントを得たいと考えていた。その際の着眼点は、①自分からあいさつをせざるを得ない状況をいかに設定するかと、②「あいさつの教育」において「楽しさ」をいかにデザインしていったらいいか、の2点である。

島根県が取り組んだ2つのプロジェクトの成果については、「学校への「ふるまい向上プロジェクト」に係る取組状況調査」と「しまねのふるまい推進プロジェクトに関するアンケート調査」が実施され、結果が報告さ

れている。紹介された事例は少ないが、そこででてきたアイデアを検討してみよう。

1) あいさつをせざるを得ない状況をいかに設定するか

小学校低学年のころまでは、親や先生にいわれるからあいさつをするし、大きな声であいさつすることにも抵抗感は比較的小さい。ところが、思春期以降はその年齢特有の恥ずかしさの心理やあいさつをしてもシカトされることへの恐れなどがあり、そうした事態に直面することを避けるため、自分からあいさつすることがなかなか難しくなる。また、あいさつ運動の期間中はあいさつができたとしても、大人自身が普段からできていないと効果はあがらず、期間が終了すると元の木阿弥であいさつをしなくなる。

この問題をクリアするチャレンジとして、鳥根県では小中連携などの校種間連携や地域連携で中学生をまきこむ活動が成果をあげていることが窺える。たとえば、松江市の津田小学校の試みでは、あいさつ運動をPTAと合同で行ったり、中学生が母校の小学校の昇降口であいさつ運動に参加したりしている。同じあいさつ運動をするにしても、親などの大人もあいさつしたり、中学生が母校の小学校に出向いてやったりするとなれば、同級生に向かってあいさつをする時より抵抗感は薄れ、より積極的にあいさつできるだろう。とくに小学生相手ならきちんとあいさつをかえしてもらえる可能性は高く、中学生のあいさつをする気持ちを勇気づける試みとなっている。

だが、高校生までもまきこんだ活動となると、地域だけでなく、高校、大学とも連携して取り組んだ事例があるようだが、詳細は報告されていない。大学とも連携ということで、鳥根県の場合、キャンパスの所在地が松江市、出雲市、浜田市にかぎられるので、これらのどこかで事例となるが、どんな試みがなされたのかは公表されている資料からは把握できなかった。

2) 「楽しさ」をいかにデザインするか

家庭・学校・地域の連携が期待されるなか、あいさつ運動をするとなると、すぐにでてくるアイデアには、実施に向けての難易度をともかく、地域全体、あるいは学校が核になって行う運動名の募集、ポスターづくり、標語づくり、シンボルマークやロゴマークの作成、たすきづくり、幟づくり、あいさつの歌づくりなどがある。

「しまねのふるまい推進プロジェクトに関するアンケート調査」からも、「あいさつ運動」とこれらのアイデアのマッチング事例がとりあげられている。もちろん、これらの試みも楽しいには楽しい。だが、それ以外にはないのだろうか。

楽しさの観点でいえば、鳥根県教育委員会が作成した「みんなさらさら ふるまいめいじん」（小学校版）で推進された「あいさつ名人」になろうという運動が、学校という枠をこえて家庭や地域に広がりを見せた大田市の志学小学校の「あいさつ名人カード」の試みがある。出発点は小学校ということだが、この試みには遊び心があり、身構えてあいさつをする必要がなくなるので、どの世代にとってもあいさつへのハードルは低くなりそうである。

ただし、中高生などの青少年が対象となると、恥ずかしさもあり、もう一工夫がいりそうである。

2. 今後の展望

今後の課題は、「あいさつの教育」をいかにデザインすると、あいさつが定着するのかを解明することである。とくに高校生以降の「あいさつの再社会化」をどう促すかにあるだろう。

1) あいさつの定着率について

そのためには、「あいさつの定着率」の高い活動について、もう少ししっかりと把握する必要がある。「学校段階別の定着率」の変化については、プロジェクトの第1期では、すでに表3でみたように「学校への「ふるまい向上プロジェクト」に係る取組状況調査」で、「児童生徒の「あいさつ」がよくなったと回答した学校」についてプロジェクトに取り組む2年前と比較したデータがあるが、その後追跡調査はされていない。また、「あいさつ」がよくなったという回答が実際にはなにを意味するのかが不明で、実態がつかみにくいといううらみがある。

プロジェクトの第2期の「あいさつの定着率」の変化に関しては、データのとり方が異なるが、鳥根県が小学校3

年生から中学校2年生を対象に独自で実施している「島根県学力調査」のなかで、「近所の人に出会ったときにはあいさつをしているか」を尋ねているので、データのある平成27（2015）年度から平成29（2017）年度までの推移をみたい¹⁵⁾¹⁶⁾¹⁷⁾。ここでは、調査結果一覧から「当てはまる」と「どちらかといえば当てはまる」として算出された％をそのまま合算して、推移をだしてみた（表8）。その結果、あいさつは、すべての学年で9割前後の児童生徒がしていることがわかる。学年別にみると、小6がピークとなっている。他県のデータがないので明言はできないが、島根県のあいさつ率は高く、プロジェクトの成果がありそうなことが窺える。とはいえ、小2以前と中3以降のデータが欠けていることもあり、高等学校の様子はとなるとまったくつかめていない。

表8 近所の人に出会ったときにはあいさつをしているか
（「当てはまる」と「どちらかといえば当てはまる」の回答分）

	平成27年度	平成28年度	平成29年度
小3	88.6	89.3	88.8
小4	90.9	91.2	92.3
小5	92.7	93.0	93.5
小6	93.0	93.7	95.5
中1	91.5	90.1	94.1
中2	91.1	90.7	90.3

2) あいさつ運動などの実施率について

それから、あいさつ運動に関しては、プロジェクトの第1期では、プロジェクト周知のためにリーフレットが作成され、そこでは県内のあいさつ運動の事例が紹介されている。

だが、プロジェクトの第2期では、推進事業の充実がすすめられた一方で、広報・啓発活動部分が縮小されたため、新規のリーフレットは作成されず、あいさつ運動の事例を紹介する機会がなくなった。ただし、「あいさつ運動などの実施率」や「啓発資料の活用率」などについては、平成25（2013）年度以降、毎年実施されている「しまねのふるまい推進プロジェクトに関するアンケート調査」によって掌握されてはいる。このうち、平成25（2013）年度版と平成29（2017）年度版では、あいさつ運動をはじめとするあいさつ関連の活動の成果や課題について報告がなされている。だが、調査はかなり限定的で、実際どのような取り組みがなされたのか、その詳細は不明である。

3) 今後への期待

ということで、あいさつの定着率やあいさつ運動の実態や効果、結果などについて、詳細に検討されたものはなかった。とくに知りたいのは、あいさつの定着率の高い試みについて、現場での実施期間や内容、方法、参加者、実施範囲などである。また、持続性のある試みや、飽きさせない工夫などについての情報も欠かせない。

島根のよさを後世に伝えたいということではじまったプロジェクトなので、第2期においても県全体の遺産として継承していくために、県内のあいさつ運動の好事例集（データベース）の作成が望まれる。そのためには、入力のための簡易なフォーマット（目的、内容、実施時期や実施期間、参加者などの方法、期待される効果、実際の成果、持続可能性などの今後の可能性など）があると使い勝手がよくなる¹⁸⁾。また、最初はうまくいかなかったが、こういうふうによたらうまいくようになったという、失敗から学ぶ事例集のようなものがあれば、いざ作成するとなると手間はかかるかもしれないが、他地域の活動の展開を勇気づけると思われる。とくに学校が家庭や地域と連携・協働していくためには、意外とコストとリスクが発生する。こうした事例の蓄積は、この辺りの心配を減らすためにも、また教師の多忙化を避けるためにも望まれる。

その際にぜひとりあげてほしい事例は、青少年のうち、とくに高校生を対象としたもので、彼らの心情を考え、自分からあいさつをせざるをえなくなる状況に直面する仕掛けのある試みである。一番てっとり早くできそうなのは、学校のあいさつ運動である。ヒントは、小中連携でうまく展開している「あいさつ名人カード」のような、なんらかのメディアを活用した試みである。面と向かってなにかをすることは、あいさつをすることにかぎらず、プレッシャーを感じるものである。そこで、人と人のかかわりを取りもつためのツールとして、なんらかのメディアを介在させたいところである。

さらに、「あいさつの教育」を含めた「ふるまい」推進の試みが家庭・学校・地域が連携して継続して行われるためには、人々の主体的参加を促すための楽しい仕掛けが必要で、そうした事例の収集が必要だろう。

それらを実現するための企画は、地域に見合ったという発想に加えて、今の時代にあったという視点も必要だろう。そのためには、人々が地域のなかでどのように結びついて、関係をもって、連携して協働していくのかにかかわる「ソフトウェア」や「教育デザイン」に革新があってもいいだろう。たとえば、活動のあり方についても HP などでも広く一般募集する手もあるように思われる。

そこで試されるのは、おそらく「遊び心」のようなものだろう。「しまねのふるまい推進プロジェクト」では、プロジェクトの開始以前からの活動を引き継ぎ、現在まで続いているケースもかなりあり、マンネリ化しているのではないかという声があがっていることを関係者から聞いた。そこで、活動を活性化するためのイメージとしては、あいさつ運動をゲーム化・イベント化する方向性があるような気がする。たとえば、若者心にあうようなインスタ映えするあいさつ運動、あるいはある種のゆるさをもったかっこいいあいさつ運動といった感じだろうか。もちろん、インスタグラムなどでは、個人情報流出やいじめなどが起こる可能性があるので注意が必要だが、とりあえずさまざまなアイデアがほしいところである。

また、取り組み事例のなかから好事例を発掘し、積極的に広報していく活動が現在停滞気味だが、たんにプロジェクトの内容を周知するためだけでなく、新たな教育企画の開発につなげ、さらには惰性になりがちな活動を活性化し、持続的な試みにしていくためにも活動の充実が望まれるのではないだろうか。

島根県のプロジェクト関係者に話を伺ったところ、プロジェクトの今後については明確なことは決まっていはいないが、事業的には平成 31（2019）年度までは継続することになっているそうである。可能であれば、「ふるまい」を推進していく上で、なんらかのノウハウの蓄積と発信を望みたい。

注

- 1) 島田博司「あいさつの教育Ⅰ－指導（しつけ）の言葉に着目して」『甲南女子大学研究紀要（文学・文化編）』第 54 号、2018
- 2) 島田博司「あいさつの教育Ⅱ－小中高における「あいさつ運動」と「クラブ活動・部活動」の影響」『甲南女子大学研究紀要（人間科学編）』第 54 号、2018
- 3) 学びを通じた地域づくりに関する調査研究協力者会議がまとめた「人々の暮らしと社会の発展に貢献する持続可能な社会教育システムの構築に向けて 論点の整理（平成 29 年 3 月 28 日）」では、「今後の社会教育行政の展開において留意すべき点」に「楽しさなくして参加なし」の視点を踏まえた取組が期待されること」とある。
- 4) 「しまねのふるまい推進プロジェクト」HP（<https://www.pref.shimane.lg.jp/kyoikusido/hurumai-0.html>）
- 5) なお、第 1 期には、プロジェクトをより広く周知・広報することを目的として「島根県ふるまい向上推進県民運動協議会」が設置された。第 2 期では、主にプロジェクトの内容を高めるため、関係機関での情報共有や取り組みに対する意見聴取を図るために、「しまねのふるまい推進連絡協議会」が設置された。そして、「島根県道徳教育推進協議会」と連携して、啓発用のポスターやリーフレット、指導資料が作成されていくことになる。
- 6) 「ふるまい向上リーフレット」（<https://www.pref.shimane.lg.jp/kyoikusido/hurumai-0.data/leaflet.pdf>）
- 7) 「広がっています 島根のふるまいー平成 22 年度 島根県ふるまい向上県民運動取り組み事例」（<https://www.pref.shimane.lg.jp/kyoikusido/hurumai-0.data/hurumaijireileafletweb.pdf>）
- 8) 「広がっています 島根のふるまいⅡー平成 23 年度 島根県ふるまい向上県民運動取組事例」（<https://www.pref.shimane.lg.jp/kyoikusido/hurumai-0.data/hurumai2.pdf>）
- 9) 「ふるまい向上コーディネーター」は、平成 22（2010）年度から平成 24（2012）年度まで非常勤の嘱託職員がプロジェクトに対して配置され、この職員が業務を行っていた。なお、平成 24（2012）年度から「ふるまい向上指導員派遣事業」がはじまり、その業務を引きつぐ形になるが、コーディネーターは事業がうまくランディングするために当該年度のみ平行して配置された。
- 10) 「広がっています 島根のふるまいⅢ」（https://www.pref.shimane.lg.jp/kyoikusido/hurumai_ri-hu3.html）
- 11) 「きらきらふるまい みんなにこにこ」（<https://www.pref.shimane.lg.jp/kyoikusido/kirakira-hurumai.html>）
- 12) 「みんなきらきら ふるまいめいじん」（<https://www.pref.shimane.lg.jp/kyoikusido/kirakira-hurumai.html>）
- 13) 「きらきらふるまい みんなにこにこ」（幼児版）「みんなきらきら ふるまいめいじん」（小学校版）活用例」（<https://www.pref.shimane.lg.jp/kyoikusido/hurumai-0.data/kirakirasiryuu.pdf>）
- 14) 「全国知事会先進政策バンク」HP（<http://www.nga.gr.jp/app/seisaku/search/>）
- 15) 「生活・学習に関する意識調査結果一覧（資料 3）」（https://www.pref.shimane.lg.jp/education/kyoiku/ikusei/chosa/H27_gakuryoku.data/04_seikatu_gakusyuu_isiki.pdf）

- 16) 「平成28年度島根県学力調査資料編生活・学習に関する意識調査結果一覧（資料4）」（https://www.pref.shimane.lg.jp/education/kyoiku/ikusei/chosa/H28_gakuryoku.data/H28_ishiki_ichiran.pdf）
- 17) 「平成29年度島根県学力調査資料編生活・学習に関する意識調査結果一覧（資料4）」（https://www.pref.shimane.lg.jp/education/kyoiku/ikusei/chosa/H29_gakuryoku.data/H29_ishiki_ichiran.pdf）
- 18) プロジェクト事業では、「事務事業評価シート」が用意されており、「成果があったこと」（改善されたこと）、「まだ残っている課題」（現状の何をどのように変更する必要があるか：①困っている「状況」、②困っている状況が発生している「原因」、③原因を解消するための「課題」）、「今後の方向性」（課題にどのような方向性で取り組むのかの考え方）、「改善策の実施状況」（前年度の課題を踏まえた実施状況）などが報告されているが、これは事業全体の評価で、あくまでも事務的な書類にすぎない。ちなみに、平成29年度の評価シートでは、あいさつ運動については、「小・中・県立学校においては、あいさつ運動等を中心に、各種行事、生徒会活動、進路指導等を通し、礼儀作法の定着やマナーの向上をめざした取組がさらに進められた」と報告されている（https://www.pref.shimane.lg.jp/admin/seisaku/keikaku/gyosei_hyouka/H29/H29syozokubetu/12-4.html）。

【付記】HPは、いずれも2018年8月29日に閲覧。